瑞応寺周辺赤色立体図
（■は令和4年度、■は今回の発掘調査区）

令和５年度　埋蔵文化財発掘調査
長宗我部一族の寺跡
第二次調査現地説明会資料

－長宗我部氏の菩提寺 瑞応寺を求めて－

記 者 発 表：令和６年２月２１日（水）　10:30 ～ 11:30
現地説明会：令和６年２月２３日（金・祝）13:30 ～ 15:30
南国市教育委員会

◎ 調査に至る経緯と経過

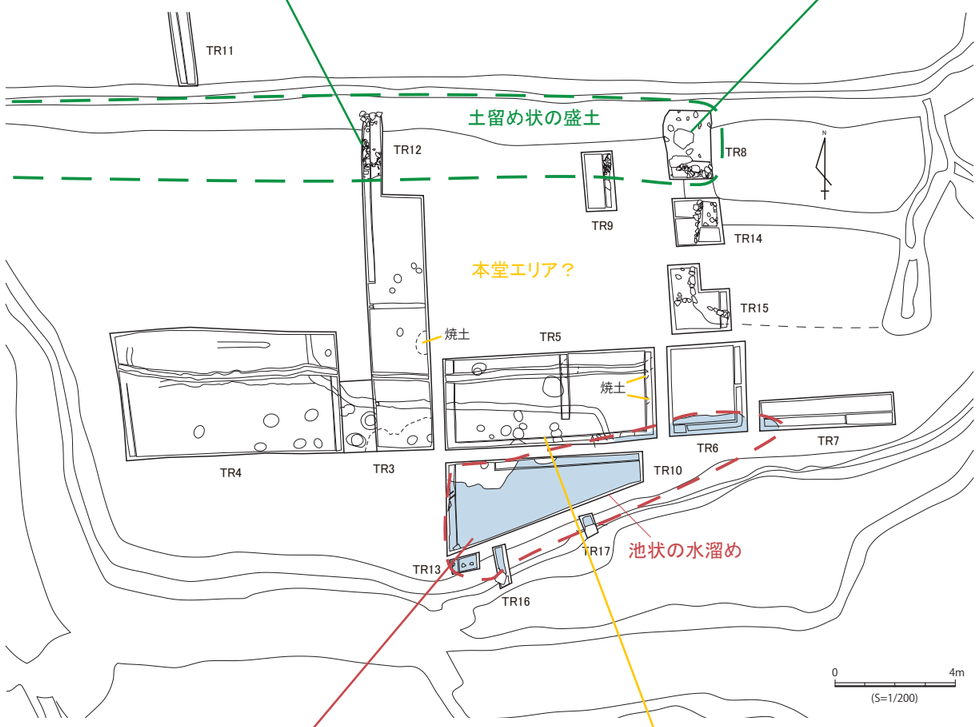
南国市の岡豊山は、戦国大名・長宗我部氏の居城があり、主郭部が岡豊城跡として国の史跡指定を受けています。その岡豊山の北麓に位置する長宗我部一族の寺跡は、長宗我部元親が父・国親と母の菩提寺として建立した瑞応寺の推定地で、国史跡追加指定を目指して令和４年度から３箇年計画で範囲内容確認調査を実施しています。令和４年度の調査では、中世に大規模な造成を行っていたことや、平坦面ごとにその用途が異なることなどが明らかになりました。第二次調査にあたる令和５年度は、寺の本堂の所在を明らかにし、その周囲の空間を探ることで、瑞応寺を建立したとされる長宗我部元親の宗教観や遺構・遺物の特性を探ることを目的として調査を開始しました。

◎ 発掘調査の概要

所在地	南国市岡豊町小蓮字重岩
調査遺跡	長宗我部一族の寺跡
調査目的	範囲内容確認調査
調査期間	令和５年１１月～令和６年２月末（予定）
調査主体	南国市教育委員会
平坦面の面積	上段：３９１㎡　下段：８６２㎡
トレンチ面積合計	６６㎡（令和５年度）

土留め状の盛土に含まれる多くの石と瓦

土留め状の盛土の角に据えられた象徴的な石



調査区平面図と空間構成

土器と古銭出土状況

平坦面中央部の柱穴や溝状遺構

◎ 調査成果

今回の第二次調査では、瑞応寺境内推定範囲の中で中心部に位置する平坦面（上段）を主に調査しました。この場所は、平坦面が３９１㎡と広く、本堂などが建っていた可能性が高いと考えられます。

● 土留め状の盛土　－ 内部の様相が明らかに －

平坦面の北辺には、東西方向に石や瓦を入れた土留め状の盛土を施していることがわかりました。盛土内の石は、石と石との間を埋めるように小さい石を混ぜ込んでおり、岡豊城の土塁に使われている技術と類似しています。また、現在の地形で平坦面の角になっている部分に直径約６５ｃｍの大きく象徴的な石を配置するなど、石が計画的に積まれていることがわかります。石の間からは１６世紀後半のものとみられるや平瓦や丸瓦が出土しています。この時代は、長宗我部氏の中でも元親が活躍した時代と重なります。

● 池状の水溜め　－ 瓦や木製品などが大量に出土 －

平坦面南側は、岩盤を削って水を溜めるような状態で使われていたことがわかりました。おおよそ東西１１m以上、南北２.５mの範囲に広がり、中には多量の瓦や、貿易陶磁、土器、木製品、古銭（明銭・宋銭）などが出土しました。瓦の形態は平瓦が主ですが、巴紋の軒丸瓦も出土しています。水溜めは、池として使われていた可能性も考えられます。この調査区から出土した瓦などは、その出土状況から瑞応寺の廃絶期に取り壊しの際、このエリアに埋められたと考えることもできます。

● 本堂エリア？　－ 柱穴や焼土面を検出 －

土留め状の盛土と池状の水溜めに挟まれ、丁寧に造成された平坦面中央部には、柱穴や焼土面などが散在しており、何らかの建物が建っていた可能性が高いと考えられます。この時代の瓦葺き建物の柱は、瓦の重さに耐えうるよう礎石の上に柱を据える工法をよく用いますが、瓦が大量に出土した池状の水溜めのすぐ近くからは礎石のない掘立柱の柱穴のみ検出しました。そのため、本堂の屋根は瓦葺きではなく、同じ平坦面のトレンチ外か、調査区の平坦面より上段に本堂とは別の瓦葺きの建物が建っていた可能性も考えられます。

◎ まとめ

今回の調査では、具体的な建物規模等に迫る遺構は確認できませんでしたが、長宗我部期の境内の空間構成をより詳細に語ることができるようになりました。来年度も継続して調査を実施し、瑞応寺の痕跡を探っていきたいと考えています。